

を
耕す

希望

イグサと畳

神戸芸術工科大学 学長

松村 秀一

Shuichi Matsumura

水田列島

本誌が皆様のお手元に届く八月のお盆過ぎ、コメの価格はどうなっているでしょうか。もう都議会議員選挙も参議院議員選挙も終わっているでしょうか、何か変化があったでしょうか。

未来の自分に宛てた手紙風になったが、本稿を執筆している夏至の頃には、随意契約によって放出された備蓄米自体は二千円程度でいくらかの店頭に並んだものの、一般のコメ価格に特筆すべき影響は出ておらず、この先のことを予想する論者の表情もすっきりとはしていない。

出張の車窓から、輝くような青田の続く日本列島の景色を見るにつけ、コメが足りているのか、いないのかも把握できていないという農林水産大臣の発言を、信じられない気持ちで思い出す。この列島は、大昔から水田を検地の対象とし、国の大きさを石高で表してきたではないか。何故、車窓からでもこれほどに見渡

せる水田の風景から、見通しの効かないコメの世界が生まれるのだろう。私たち都市に住む多くの日本人が、コメは食っておきながら、水田は出張の時くらいにしか見ていないからなのだろうか。

四〇年前のイグサ農家

そう言えば、この水田で栽培されているのは稲だけではない。畳表の原料になるイグサも水田栽培だ。六月に開催された「現代・和室の会」(<https://gen-washi.jp/>)の総会で、久しぶりに福山大学の佐藤圭一教授にお会いした。学生と一緒にイグサの栽培や畳表の製造にまで挑戦する行動派の和室研究者だ。その佐藤教授から

「松村先生、備後イグサの農家はついに一軒だけになってしまいました」と深刻な話を聞かされた。

備後と言えば、かつては熊本と並ぶ畳表の産地。そのイグサ農家がたった一軒というのだから言葉が出していないのは何故なのか。それは取りも直さず、畳を敷き詰める和室の需要が急減しているからである。そうして、イグサが採れなくなると、従前からの畳はできなくなり、それを用いた和室もできなくなる。鶏が先か卵が先か。残念ながら負のスパイラルという状態である。

本連載でも何度か触れてきたことではある。しかし、状況はよくなっていない。むしろ芳しくない。私たちはもう和室を必要としないのだろうか。この国から和室が消え去ってもよいのだろうか。仮に消え去ったとして、その時私たちに残される日本の建築文化とは一体何なのだろうか。

和室が、そしてイグサを使った畳がなくなってしまう未来を想像すると、その喪失感にいたたまれなくなる。

どうやらこの喪失感につながる、現実社会の衰退は、特にこの一〇年が著しいようである。私たちの責任だと言っても間違いない。

ない。更に日本最大の産地熊本のイグサ農家も驚くべき速さで減少しているのだという。

熊本のイグサ農家については、四〇年ほど前の一九八九年三月のことになるが、熊本県農業試験場が「昭和六十三年度農業経営研究に関する試験成績書―いぐさ作経営の発展方式解明と市場対応―」と題し、熊本が大規模な産地に成長したのは何故だったかという報告書を出している。「隔世の感」とはこのことを言うのだろうか。

和室の危機とイグサ農家

その後佐藤教授に教えていただいた現状を整理すると次のようになる。読者の皆様には知っておいていただきたい事実である。

基本的に畳は日本独自の床材なのだが、イグサ・畳表の生産量は中国産が八割で、国産は二割に過ぎない。その国産の九五%以上は、熊本県八代地域に集中している。

ところが三〇年ほど前から熊本



イグサを育てる田んぼでの杭打ち。「備後表継承会」として福山大学の学生も参加している(写真提供:佐藤圭一氏、2018年撮影)

のイグサ農家は急速に減少し、この一〇年で半減している。実は高いブランド力のある「備後表」もその九%は熊本のイグサが原料で、これを「びんご畳表」という地域団体商標にしている。その頼みの産地熊本も衰退が著しいというわけである。

この現状に関する佐藤教授の見解はこうである。熊本産地が畳表年間一〇〇万枚規模で頑張っているうちに手を打たないと、ある規模を下回った時に突然連鎖して、国内産

鶏と卵

かくも著しくイグサ農家が衰退